

高度経済成長期

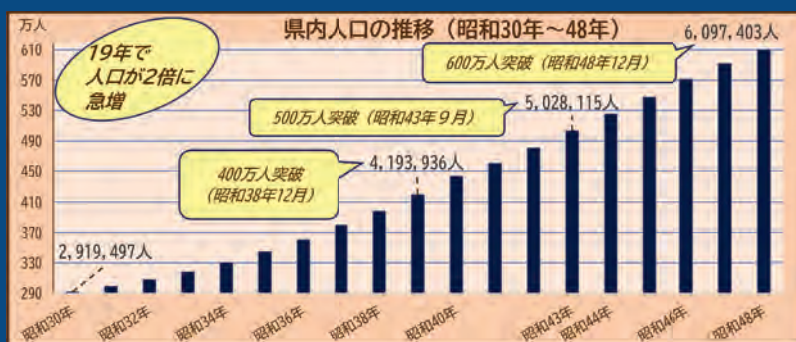
※ 昭和30(1955)年頃～昭和48(1973)年頃 ※

京浜工業地帯の発展と大規模開発

日本が世界有数の経済大国へと発展した高度経済成長期、京浜工業地帯を中心とする県内の工業生産は、日本の飛躍的な経済成長をささえました。また、工業生産の増加に伴い県内の雇用も増加し、神奈川県には全国から人が集まりました。

こうした人口の急増に対応するため、県内では大規模団地の建設が続きました。

その中でも、横浜市磯子区の汐見台団地は、約1万6千人が暮らす職住近接都市として建設されました。早くから無電柱化なども取り入れ、後に続くニュータウンの先行モデルになったと言われています。



県内交通網の拡張

この時期には、第三京浜道路の開通（昭和40（1965）年全線開通）、東名高速道路の完成（昭和44（1969）年）など、神奈川県内の交通網が劇的に改善されました。これにより、物流が拡大し、人々の生活圏が広がりました。

また、京浜急行、小田急、相模鉄道といった鉄道網が都市部と郊外を結び、通勤・通学による都市生活の利便性が向上しました。特に横浜駅は交通のハブとして重要な役割を果たしました。

東京オリンピックの会場となった神奈川県

昭和39（1964）年に開催された東京オリンピックでは、神奈川県でも競技が開催されました。例えば、ヨット（セーリング）競技は江の島（藤沢市）で、カヌー競技は相模湖（現・相模原市緑区）で開催されました。今もなお競技会場として多くの愛好者に親しまれています。



かながわ「昭和100年」

つながる心、ともに未来へ